廃校は資源。未来を創造する場。

演出家・鳥の劇場芸術監督　中島　諒人

1 鳥の演劇祭

毎年9月に演劇祭を開催している。08年が1回目で、毎年継続し本年で11回目となった。東京などでも演劇祭は開かれるが、一定期間の中での散発的上演となりがちで、「祭」としての盛り上がりに欠ける。ヨーロッパではフランスのアヴィニョン、イギリスのエジンバラでの開催が有名。いずれも歴史のある観光都市で、街中の教会などが期間中劇場に変わり、街全体が盛り上がる。

鳥の演劇祭は、規模的には比較にならないが、9月の三週末を中心に町内に複数（今年は5つ）の上演会場を構え、海外からの招聘団体（今年は韓国、イギリス、アメリカ、中国）も含めて、一日に多くの上演を楽しめる。上演だけではなく、町内の空き家や空き店舗を使ってショップやカフェが出店し、演劇以外の楽しみも多い。演劇は日本では分かる人だけのための少し特殊な分野とみられている。しかし、鳥の演劇祭は、上演演目の多様さや、関連企画や楽しいイベントの豊富さで、地域の中で広がりを持つようになってきている。

上演　鳥の劇場『三文オペラ』

上演　鳥の劇場『剣を鍛える話

2 鳥の劇場の活動

鳥の劇場は、まずは演劇を創作する劇団としてある。2006年に私が郷里鳥取に戻り、劇場として活動できる場所を探し、鳥取市鹿野町の使われなくなった小学校体育館と幼稚園に出会った。東京でいっしょに活動していた俳優やスタッフが、地域の中での活動に興味を持ち、多くの人が移住してくれることで活動が本格化した。社会の中で演劇が尊敬され、劇場という場がコミュニティーの中心となることが、当初からの理想であった。だから、創作集団であることを中心に据えながら、地域のため

演劇祭劇場エントランス

施設外観

の様々な貢献を考え、提案し実践してきた。演劇が蓄積している知恵を、いろいろな形で地域に届けることで、「演劇や劇場は地域の未来のために必要なものだ」と、多くの人に認識してもらう挑戦であった。その一つとして演劇祭も行い、毎年バージョンアップしている。

また、地域の学校において表現ワークショップに取り組んでいる。他者と協働して創造的な仕事ができる人材の育成が目標だ。障がいのある人との演劇創作も行い、県内外や海外でも公演を行なっている。障がいの有無にかかわりなく、人が支え合って生きる共生社会は実現されるべき夢だ。

組織はNPO法人、メンバーは20名ほど。俳優、技術スタッフ、運営系のスタッフが、多様な仕事を兼務しながらフルタイムで活動している。

小学校でのワークショップの様子

3 施設とここまでの経緯

旧小学校体育館と旧幼稚園園舎を鳥取市との契約で借りている。幼稚園の遊戯室は収容数100名程度の上演空間としても使えるし、劇場での上演時には開演までの時間を過ごしてもらうホワイエ（客待ち空間）となる。上演後は、このホワイエでアフタートークも行う。体育館を改造した劇場がメイン上演空間で、間口約12メートル、奥行き12メートル、高さ8メートルの舞台を持つ。客席は35センチピッチで9列のひな壇になっている。最大で200名の収容ができる。

劇場（体育館）は、耐震強度に問題があり、老朽化もしていたので、2016年に鳥取県と鳥取市が改修工事を行ってくれた。費用は七千万円余であった。しかし、客席や舞台機構の設備は、行政はカバーしてくれないので、そこは当NPOが約一千万円で実施した。寄付と金融機関からの融資で対応した。こんなことが可能になったのは、やはり地域の理解と応援が大きい。それなくば、そもそもスタートもできなかった。地域の皆さんと観客の皆さんの応援、行政の理解が大きな支えとなっている。

演劇祭パーティー

4 今後の展開

私どもの実践は、芸術団体が恒常的に地域で活動することで成り立っている。それは、活動資金（事業費と経常費）の確保の問題と直結し、我々の活動が商業的なものでないことから、国や自治体からの公的支援も得ながらの事業継続となる。それは、常に活動の社会的意義を問われ続けることとなり、極まるところ、地域の未来のためにどんな貢献ができるかということが、鳥の劇場の存在意義を測る指標となるということである。安定的な社会であれば、現在の社会で必要なものと、未来の必要が大きく変わらないから、未来のための貢献もわかりやすい。しかし、現在は社会の大きな転換点である。先が見えない以上、何が必要な備えかもわからない。本質的、根源的に考えるしかない。

そこに演劇がマッチしている。現代演劇は、社会を批判的に捉えるという極めて重要な役割を持っている。劇場は人と人が出会い、作品を通じて言葉や思いを分かち合う場である。「今だけ、金だけ、自分だけ」のグローバル化が猛威を振るう現在にあって、演劇と劇場は未来を考え、人をつなげ、人を育てる場として大きな意味を持っている。学校は学びと成長の場である。地域の人の思いが蓄積された場であり、もともと未来を作る場であった。その場所を芸術家が占有し、未来のためのニーズを探し、それを試み発展させる。我々にとって自由に使える学校施設は、実に創造的で生産的な場である。作るだけではない。生まれた価値を醸成、発信、蓄積し、新たな出会いを生み、人材を育てる場でもある。